

赤彦の六曲半双金屏風について

北澤 敏郎*

アララギ会員で教員であった竹内泰比呂（出身不詳）が大正二年の寒い頃、赤彦が郡視学として豊平小学校に参観した折のことである。竹内は四年生の担任で綴り方の授業を見て頂いた。その後二年経た大正四年の暑中のある日、赤彦が高木の家に帰省したと聞くと、すぐお伺いした。顔を見ると竹内君が上がってくれ給えと元気な声であった。赤彦から歌や四方山話を聞かされた。其の後に竹内がお願いした歌を書く事を承知された。竹内は嬉しくて暑い湖辺の道を上諏訪に戻って紙を買って帰った。

赤彦は大きな硯を出したので、精出して墨をすった。奥さんも少し手伝われた。やがて赤彦は太い筆に墨をふくませて、新刊の歌集『切火』の中から椿の歌と芒の歌を選んだ。

赤彦の筆を持った手は新しい唐紙の上を滑るように忽ち五枚ずつ書かれた。赤彦の太い筆先から生まれる一字一字は、撥ね上がる生魚の様にぴんぴんしていたという。十枚の全紙を書き終ってから赤彦は、大分大きいな。こんな大きい字はこれが書初めの書終りかもしれないよと言って、幾重にも新聞紙に包んで竹内に下さった。それが芒の歌五首である。

さてその後竹内より、当時アララギ会員で赤彦に師事していた今井野菊（本名すみ江茅野市駅前寒天問屋平左衛門夫人）の手に渡った。昭和七年七月の事である。そして野菊さんは京都でこの五枚を六曲半双の金屏風に表装して、今日まで門外不出として所蔵せられた。屏風は一枚ずつに五面残る一面は白紙である。

赤彦の次男健次氏は、書に付いて初期中期晩期の三分して、歌集『切火』以後の大正四五年になると、赤彦の壮年時代を思わせる意気旺盛の書体となり、その代表となり、その代表と思われる作は八丈島で詠んだ島の歌で、紙面いっぱいにあふれる若さと力が跳躍している自由奔放の趣があり、この中期を代表する書体だと書いている。屏風の価値に付いては、日本中にこれほどの大物は無い。字も赤彦の最も油の乗り切った齢四十歳の時であり、歌も書も共に全くすばらしく、正に世の逸品である。

野菊さんは、諏訪高女入学の時からアララギに入会して赤彦の選を受け、後に森山汀川にも師事し、歌集に『少林集』『行雲』がある。また茶道華道の師匠であり、郷土史の研究もした。

北澤は野菊さんとは同じ汀川門下であり歌仲間として若い頃より親交があり、また遠縁にも当たることもあり、平成十五年八月、次男の今井久榮氏が作品の寄贈を申し出たので、北澤を介して市の岳麓文芸館に寄贈が決まったのである。

*八ヶ岳総合博物館専門委員

芒の歌五首

- 船を出でし心現³²⁷なし真青なる芒の中に入りけるかも
- いとどしく青み静もる芒の中一人ぼつつり行きとどまらず
- 青、し芒の中に一匹の牛を追ひ越しはろかなる道
- 島すすきい行き寂しむ身ひとりのうしろに大き海光り見ゆ
- 芒の島吾が乗りて来し一つ船けぶりを吐きて去るにかあるらし

島木赤彦



平成 15 年 8 月 6 日金屏風一般公開にて、北澤敏郎先生の解説